

審査員長 講評

川上 元美（デザイナー）

我が国は古来より、四季の変化に彩られた雪月花の美をその季節感で捉え、愛でてきました。とりわけ雪の結晶は、刻々とうつろい行くはかなさも持ち合わせた、精緻であり且つ清らかな存在で、抽象化された雪輪文様、或いは雪華文様として、生活道具の様々な部分に用い、描かれてき、他に類を見ない味わい深い文化の綾を育んできました。

このような雪に中谷博士が科学のメスを入れ、初めて人工的に雪の結晶を作ると共に、造形の美しさや神秘性を世界に知らしめましたことは良く知られております。

この著名な加賀出身の物理学者、中谷宇吉郎の生誕 100 年を記念して、加賀市、雪の科学館、雪や氷の自然の美しい造形をテーマに、暮らしの中のデザインを募集し、国外も含め広く全国より 303 点に及ぶ、様々なジャンルからの作品の応募を得ました。

第一次審査はスライドによる審査が行われ、議論をつくし 109 点が選ばれました。スライドを眺めながら実物はどんなだろうと期待感が膨らむものや、折角のスライドがピンぼけのため、出品者の意思がうまく伝わらず落選していったものがあったのは残念でした。

最終審査は期待どおり 109 点の力作が集まり、所狭しと並べられた審査会場に興奮を覚えながら全体を展望し、多様な作品の内容に、整合性と理解度を深めるためにも、ディスカッションを交えながら何度も会場を巡りました。審査員にもそれぞれの見解があり、「応募作品の定型化された雪の結晶よりも、造物主の造形である雪の結晶の美しさを改めて認識すると同時に、応募者はもっと結晶の多様さや造形の妙を知り、研究してほしい、少々不満である。」「『雪は天から送られた手紙』という名言を中谷博士は残しましたが、この意味の理解を深めてほしい。それにはこの催しが継続されることが必要である。」といった意見や、別の視点で、「雪や氷のテーマが、このように、多様なマテリアルを介して、多彩で幅広いイメージに展開されていることに、驚きと感銘をうけた。」といった意見もあり、中谷博士の人となりがそうであったように、「科学」と「文芸」が融合した「雪」のテーマの面白さを、そして深さを改めて気付かされました。

午後から、各審査員が各々賞候補 9 点を選出、それぞれの推薦演説を行い、協議のすえ約 30 点に絞り、再びディスカッションを重ねた結果、僅差で各賞が決定しました。また、賞からもれた作品の中から 8 点を佳作に推挙することになりました。

金賞は「マイクロコスモス・冬の日」が唯一の満票で選ばれました。「こんなに美しいのに、アツという間に消えてしまう。何とか保存して誰かに送りたい。」という気持ちが見事

に結晶した作品。銀賞の「Calado」、銅賞の「to clear」はそれぞれ陶磁やガラス素材の持ち味と熟練した技術、そしてイメージが実にうまく合体した秀作。雪印乳業賞のステンレスによるオブジェも力強い作品です。

雪や氷をテーマとしたデザインのコンペティションはおそらく初めての試みでしょう。科学する視点からテーマを捉えた作品、またイメージや心象風景として情感豊かに表現された作品など、ガラス、陶器、漆、紙、金属など素材の多様性や、CG 作品も見られたこのジャンルの広がり、通常のクラフトやデザインのコンペと少々切り口の異なった実にユニークなものとして出発しました。

21 世紀を目前にし、世界の政治、経済、社会は著しく変化を遂げようとしており、デジタル・テクノロジーによるグローバル化等がその速度を助長しつつあります。しかし、一方では自然環境や地域のことなど、身近なことに関心が高まっている今日、ぜひこのコンペをビエンナーレの形式で継続していただきたいものです。これは関係者の大いなる願いと同時に、中谷博士を生み育んだ加賀市の風土や文化を発信することに繋がることと確信します。